

理事

津久江一郎

Ichiroh TSUKUE

広島・瀬野川病院



理事就任の挨拶

ずっと以前夜遅くに、小生が医局時代の助教だった先生より、小生の近くで開業しておられた浅田先生（故人）のところに電話があった。ちょうど浅田先生の奥さんがその電話をとられ「津久江先生は覚せい剤をしておられるらしい」と、びっくりしてご主人に取りつがれたようだ。

浅田先生は奥さんの勘違いに笑いながらそのことを小生に話された。「どうやら覚せい剤中毒者対策の研究班ができるらしいので先生にも参加してほしい」との話であった。昭和58（1983）年のことだった。

正式には“覚せい剤中毒者対策に関する専門家会議”というものだった。たしかにそれ以前、昭和56（1981）年の“臨床精神医学誌”（1981年10月号）に“覚せい剤中毒”が特集として編まれ、小生は“覚せい剤中毒の臨床像”について執筆していた。このころ、第二次覚せい剤乱用期で全国に乱用者が氾濫し、その対応には大変な苦勞をした。これが縁で運よく広島医学会榎殿賞や日本医師会の最高優功賞まで授与された。授与式が行われた日本医師会はまだ木造で神田にあったのを記憶している。

まだ小生が50歳になる前であったと思うが、これが縁で日精協に出入りするような羽目になった。当初は日精協会館も新橋駅前ビル1号館にあ

った。

以来20数年間、主に医療経済委員会だったが、2年間で約7,200人余りの（自治体病院が1/3分担）精神鑑定医を精神保健指定医に丸2日間の講習により変更する責任を負わされたりもした。そのほか多くの厚労省の審議会、日医の医療経済委員会を始めとした委員会に出させてもらった。

懐かしいのは、いまは亡き河崎茂会長のもとでいろいろと旧厚生省の役人と精神科病院の将来について真面目に折衝する（また駆け引き、または高度の政治決着とかいろいろな手法）術を教わったことである。そのなかでも米国各地の視察見学に同行した際には、将来についての貴重なアドバイスももらった。視察が終わってニューヨークのダウントウンで食事を終えたとき、街に出てみるとすでに陽は沈み暗くなって、歩いて来たはずのホテルの方向がまったくわからなくなって慌てた。そのとき河崎会長は「ハイ右、そこを左」と正確に誘導してくださり、ホテルにたどり着くことができホッとしたことがある。動物的勘なのかオリエンテーションのよさに感心したものである。

話は変わるが、いま、日本医師会を初めとしてわれわれの業界だけでも各地で医師会、各団体の選挙が行われている。

それに比してわが1,208病院の長の選挙は行われなかった。現会長は前述の河崎会長とは一風異なるタイプではあるが、しばらく振りの優れたリーダーシップを持った傑物である。

日精協誌の巻頭言を一読するだけで会員ならどなたでも納得されると思う。一読して会長の全責任を担当する勇氣、先見洞察の機眼、非凡なる識見、適切なる統合力に満ち満ちているのが共感される。これまでに比べて月とスッポンである。

これからも山崎会長を信頼しサポートする者の1人である。